

小仙の「引窓」を聴く

京大劇研究會

梅徑莊主

京大劇研究會は竹本小仙鑑賞の會を同校學生集合所階上で十五日夕六時半から催した。曲は小仙の十八番物の、「引窓」が選まれ、先づそれに就いての解説を太宰博士が詳細に述べられた。主人公與兵衛の十次兵衛が義理人情には透徹しても國法悖戾への反省が足りなかつた點を擧げられたなど、まことに傾聴すべきものであつた。

「引窓」は流行歌に始まる冒頭の、放生會と月見の供物を婀娜な嫁と姑とが仲睦ましく飾りつけてゐる情景が、本文を読んでも芝居を見てもたまらなくいいのであるが、當夜は濡髪が二階へ忍んでから後、即ち與兵衛の戻りか

らであつた。(先般放送の古靱も同様)

この主人公は勿論與兵衛であるがそれ以上に複雑な心の葛藤を持つのは老母である。實際老母の方が倅與兵衛より活躍してゐるし、心理は複雑でも無理がない。小仙の老母の描寫がもつと精緻になつたら、その得意の「引窓」に一層の光彩を添へるであらうことは疑ひない。

登場人物六人の中では、嫁おはやが前身それ者らしい色氣もあつて、一番佳く描き出されてゐたやうに私は思つた。所詮、小仙もやつぱり女である。この人の「新口」がいいものだといふことも、これから考へて肯肯出来るや

藝界展望

▽文樂の五月 廿四孝(勘助住家、竹の子堀り、物語)、鬼界ヶ嶋、加賀見山(廊下、長局、奥庭)、酒屋、雪月花(鶯娘、關寺小町、義士櫻)。古靱の長局、榮三の尾上、文五郎のお初。鬼界ヶ嶋は織、榮三の俊寛、紋十郎の千鳥、玉助の瀬尾。

▽京阪劇壇(五月) 角座(前進座)歌舞伎座(新生新派)中座(續演)南座(厚生劇)

▽護國神社奉納淨曲 新作「水づく屍」上演に因み、織大夫、團六、網延等奉仕。

▽劇團新派結成 四月八日東都歌舞伎座に舉式。顧問喜多村、理事小織、梅嶋、小堀、英、伊井。評議員十七名、團員七十名

▽大隅の沼津 四月九日夜BK放送。

▽森曉紅氏長逝 享年六十二、東寶名人會、落語研究會顧問。花柳小説を得意とす四月九日逝く。

▽同人鴻池文樂評 四月十日讀賣所載。

▽同人武智中座評 十二日讀賣紙上發表十六日同紙に島江鏡也の抗議、廿三日それ

うな氣がする。

全體に互つて感動詞、間投詞、或は補足語の多いのが耳についた。それが役立つてゐるのと、さして必要もないのと、在來の型に嵌つて平凡になつたのと、それはいろいろであつた。その中で、老母の「ヲ、誤つた長五郎」とあるのを「ア、」と寫實的にしたが感情の表現は少し違つた。但しそれを必ずしも悪い解釋といふのではない。寧ろ私はさうした場合、日本語の持つ面白さを思ふのである。

俗語に據つて書かれた原文を殊更文語に改めた處もかなりあつた。例へば「どうしてなりとも又逢はれる」を「逢はる。」、「猫が子をくはへ」を「猫の子が」、「晝夜と分ける」を「分くる」と訂正したのがそれであるが、淨曲は教科書でも純文學書でもなく、大衆を相手としてゐる上から言つて、そんな心づかひは餘計なことだと思ふ。

本文を省略したのは二個處、「人を

殺すといふやうな不孝な子が世にあらうか」から直ぐ「せめて親への孝行に」へ飛んだのと、地合の「剃るべき髪は」以下「定まらず」までを抜いたのとであつた。

傳藏の詞で「牛部屋、柴部屋、或はコウ二階などを吟味致したいハ、」、「と語つたのは既に長五郎の忍んでゐるのを感じてゐるかのやうでもあり、テレ隱しのやうな笑も不得要領なきらひがある。それから、老母の「今の思ひには替へられぬ」を受けての「へツエ、是非もなや」は難しい處なのであらうが、印象が残らない程で、喰ひ足りなかつた。地の「袖は變らぬ」を「かはかぬ」と改めたのと、「お心根が痛はしさに」を「いじらしさに」としたのは少し意味が違ふし、それに後者は目下の者に云つてゐるやうで面白くないと思ふ。

前に述べた「是非もなや」と、後の「南無三寶」の言ひ廻し、その他二三流石に古観なるかなと思つた處があつた

に對する武智の痛快なる反駁。

▽人形劇試演 四月十六、七日、松坂俱樂部に小山内薫作「仲よし」その他を公開

▽紙芝居新作發表 十五日、松坂屋ホールの大阪市文化紙芝居研究會創立總會に、

「蒙古襲來」を鳴物入で賞演。

▽國民劇團創立 京都朝日會館に四月十八日、五月八九十、第一回公演。

▽東都五十義會 四月十七日巖大夫一周忌追善會を日本橋俱樂部に、廿三日幹部會を並木俱樂部に催す。

▽小仙の「引窓」 五月十五日夕、京大劇研主催にて學生集會所階上に熱演。太宰博士の解説。

▽近松研究會 十七日午後一時、八十六回を法妙寺に開催、木谷蓬吟氏講演「日本人の海外活躍性と商傑毛利右衛門」

▽古観大夫の道明寺 廿六日夕、京大學生集會所に、三味線清六。「廿四孝」狐火を織大夫、清六、團六。榮三の人形入り。

▽素女會の櫻時雨 土佐大夫、仙左衛門の新作で故吉兵衛が得意の物、その追善の意味で掛合にて廿六日東劇に上演。